

優秀賞

孤独と孤立をなくす第三の居場所を

貞静学園中学校 長崎 大晴

「ボランティアの仕事だろうが！」

夕方の公園に怒鳴り声が響き渡りました。その日、池袋の公園では炊き出しが行われていました。炊き出しとは、生活困窮者や路上生活者の人々にお弁当や日用品を配布したり、生活や健康に関する相談を受けたりする活動のことです。僕の兄がボランティアに興味を持ち、どのような活動をするのか実際に見てみたいと言うので、僕も一緒に公園に来たところでした。そこで聞こえてきたのが怒鳴り声だったのです。

どうやら、杖を持っている男性が椅子から立ち上がるのを手伝ってほしいと、声の主は訴えているようでした。怒鳴り声を聞いたスタッフの人がすぐに男性の元へ駆け寄ったので事なきを得ました。けれども、人の役に立ちたいと思っていた兄は、褒められこそすれ怒られるなんて想像もしておらず、自分にはできそうもないと心が折れてしまいました。

僕は小学六年生のとき、「としま子ども会議」に、中学一年生のとき東京都が実施する「ワールドキャンパス in ベルギー」に参加しました。その両方で議題に上がったのが居場所の問題でした。

Leave no one behind.誰一人取り残さない。SDG s のテーマにも掲げられている言葉です。現代社会の問題である「孤独」と「孤立」をどう防いでいくか、各分野で取り組みが進んでいます。僕は研修を通して、子ども・若者をはじめ、誰一人取り残されることなく、自分らしくいられる居場所が不可欠であり、自分たちの居場所を自分たちでつくっていくことが大切であるという結論に至りました。

しかし、炊き出しの公園で突き付けられたのは、孤独や孤立を抱えた人がまだまだたくさんいるという現実だったのです。

あの怒鳴り声はなんだったのだろう。心の中にしばらく残っていた疑問が消えるきっかけになったのは、祖母が営む喫茶店のお客さんに「保護司」の人がいたことでした。

保護司は、犯罪や非行をした人の立ち直りを支援する仕事です。過ちを一度でも犯してしまうと、社会はなかなか受け入れてくれません。家族でさえ見捨ててしまうことがあるそうです。戻る家もない、就職先もない、相談に乗ってくれる人もいない。生きづらさを抱えながら自力で立ち直ることは難しい。そこで、罪を犯した人が地域で生活しやすくなるよう、住まいや仕事など多岐に渡る相談に親身に耳を傾けるのだそうです。時間と労力をかけて根気強く更生を見守っていく中で、保護司との対話の場は居場所のひとつになっていると思いました。

英語圏では、家庭を第一^{ファースト}の居場所、学校・職場を第二^{セカンド}の居場所、そして、自分があ

まま過ごせる場所を第三の居場所^{サードプレイス}と言います。家庭や学校は常に同じ人間関係で、時に成長を求められます。親や先生からの言葉にプレッシャーを感じることも。そこで必要とされているのが、サードプレイスなのです。

現在、僕たち中学生のサードプレイスとして注目されているのが、「中高生センタージャンプ」のような交流施設です。安心して自由に過ごせること、社会や地域の一員であると感じることができること、自分たちが地域の力になることを目的に運営されています。僕は豊島区以外の施設も見学して、一人で漫画を読むもよし、友達とおやつを食べるもよし、ひたすらギターの練習をするもよし、それぞれが伸び伸びと、そして生き生きと過ごしている姿を目の当たりにしました。

皆が思い思いにくつろぐ場所、僕は祖母の喫茶店を思い出しました。毎日決まった時間に決まったお客さんがやって来る。コーヒーを片手に新聞を読んだり外を眺めたり、ちょっとした困り事や愚痴を言って笑い合う。祖母の喫茶店が地域のサードプレイスにもなっていることに気が付いたのです。

あの怒鳴り声がよみがえります。声の正体は、ボランティアの人に助けてほしい！という切実な訴えだったのではないかな。助けてくれると信じているから声を上げたのではないかな。そして、助けが必要な人が目の前にいるのに、自分一人では助けられないという悲痛な思いもあったのではないかな。重要なのは、手を伸ばしたときに、その手を受け止めてくれる誰かがそばにいることなのです。

僕は四月に中学三年生になり、将来をどんな仕事をしたいか、大学でどんな勉強をしたいか、今何をすべきか考えるようになりました。世の中には多様な人がいて、多様な仕事があります。その中で、炊き出し、更生保護という現代の社会問題と隣合わせの活動を知りました。そして、僕も社会の課題を解決できるような仕事をしたいと思うようになりました。孤独と孤立をなくし第三の居場所をつくり、社会を明るくしていけるよう、相手の立場に寄り添って一緒に考えていきたいです。